

詩同人誌評

第14回

詩論と実作の あいだ

中塚 鞠子

思潮社の「現代詩手帖」七月号で、「詩論と実作のあいだ」という特集を組んでいた。野村喜和夫の、詩論が書かれなくなって久しい、で始まる「詩論と詩作の関係をめぐる全史」という作品を読んだ。詩論とは詩評論とは違って、自分の詩をそれに重ねて書かねば詩論ではない。自分の詩から導き出さねば詩論ではないのだ。萩原朔太郎の『詩の原理』が例に挙げられる。その後西脇順三郎、鮎川信夫、大岡信、入沢康夫、岩成達也などが例に挙げられていた。彼らの詩自体がかなり難解でそれを詩論と合わせて読むとなると頭が痛くなりそうである。小池昌代の「遺伝する声」萩原朔太郎・米津玄師・入沢康夫、は大変面白く読んだ。

詩を書くということは実に難しい。詩論を書くとなると更に難しい。

ずいぶん前のことだが、文校のチューターをしていた故滝本明さん（文校で同期だった）に「詩論を持たないといひ詩は書けないよ」と言われたことがあった。また尊敬するある人からは「いくら詩論を書いても、いい詩が書けるわけじゃないよ」と言われたこともある。今では詩論が無ければいい詩が書けるわけではない。詩論を書きたい人は書けばいい、と、割り切って考えるようになっていく。それより、いま沢山出てきている若い人たちに詩論を書いてもらいたい。そうすれば彼女（彼）等の詩がよく解るかもしれないから、詩論ではなく、他の人の詩集評を書く。自分が詩を書く上で大変勉強になると思う。今回は、届いた詩誌の中に、詩集評が結構あったので、注目したものをあげてみた。

美濃千鶴「林美佐子詩集『ピコピコハンマー』」
（「石ノ森」203号）

坂口安吾の『安吾捕物帖』に、「ロツテナム美人術」という作品がある。大資産家の当主が大仕掛けの手品によって「妻と二人の侍女は三位一体の同一人物である」と思いつまされ、精神を病む話である。謎解きよりも、三人の女性が幻想的に入れ替わる場面の、三位一体の怪しさが印象に残る作品だった。（略）

「谷の集落に／墓があり／家があり／古いブリーフが干してあった／家の奥で／男が浴槽に人形を沈めていた／私に男が言う／解釈してください／（略）／家の奥で／男が私を浴槽に沈めていた／（略）私に男が言う／介錯してください／ツバキが花首から落ちた／人形的首だった……」（ツバキ）浴槽に沈められる人形↓私。落ちるツバキの花首↓人形的首。

この猥雑に見える詩を、特徴づけるモチーフは（入れ替わり）だという。そしてある部落では死と生と性が三位一体となって繰り返されるが、詩は最後に収束されてあざやかな展開を見せている、と美濃さんは書く。

この詩集では（壊れる）という言葉や、（壊れる）ことを連想させる行為が随所にみられる。これも『ピコピコハンマー』の詩の世界観を形成する重要な要素のひとつであろう。

「隣のおやじが／私の頭を／ピコピコハンマーで叩いてきた／私の母は私に／無視しておきなさい／略／隣の畑に／脚だけの人／逆さまに植わっていた／脚だけの人／股は／少し開いていた／隣のおやじは／水やりをしたり／撫でたりしていた／略／隣のおやじの身体を各所をピ

コピコハンマーで私が叩く／強弱をつけて叩くと／隣のおやじの喜ぶ声に強弱がつく／脚だけの人が／なまめかしく揺れている／私は私の母か／私は脚だけの人か／誰かが壊れた」

〔ピコピコハンマー〕

ここでも、ヒガンバナが女の群れになり、私が母になり、母が私になったり、私は脚だけの人になったり、入れ替わりは錯綜する。脚が股を広げて揺れていたり、ピコピコハンマーで叩かれて喜ぶおやじ。猥雑で倒錯した狂気の世界が展開していく。

美濃さんは「何が壊れるのか、何故壊れるのか作者は語らない。ただ、軽やかな言葉を操りながら、水底には情念と孤独がどす黒く沈殿する深い古沼のような世界。読む者に容易に正体を掴ませない。作者の手にはピコピコハンマー。軽やかなタイトルの、軽くない詩集である」と締めくくっている。この詩集の芯をよく見つけて見事だと思う。

牧田榮子「木村恭子詩集『食品概覧』を読む」
〔ア・テンポ〕67号〕

—その表情のうちを見つめる と副題がついていて、まるでビタミンのシャワーを浴びたように疲れた意識を回復させてくれる言葉

に出会う、で始まる木村恭子の『食品概覧』の感想である。木村恭子さんは広島の人だがとても面白い発想をする人で私は『ノースカロライナの帽子』以来のファンであった。この詩集を取り上げてくれたことは嬉しい。

この詩集、目次には〈ミニトマト〉〈キャベツ〉〈塩〉〈ケチャップ〉などと食品名が並ぶ。ところが詩は実に面白いのだ

「ジョイスはおいしいねえ ジョイスは」
パーマをきつくかけた叔母はビスケットを
はおぼりながら言います 彼女は物事を自分
だけでやりとおすことができる女、つま
り勝気な型の女だった (略)

訪ねて行くといつも怒ったようにいます
「玄関は内側からきつちり閉めたらうね
お前はだらしがないからね そのドアも早く
閉めて！ うがいと手洗いをしなさい(略)
「気の利かない娘だねえ はやく二階の人
たちに声をかけておいで」(略)

長い名前ですが(いつかは分かってもらえる時が来る)と(どうしても分かっても貰えないことが人にはある)の二人が二階に間借りしています でも二人揃っていることは減多になく 今日一人の方は出かけているそうです (略)

私は叔母が少々苦手ですが 二階の一人に会えたので今日は良い日です

〔菓子(ビスケット)〕

ゴシック体の箇所はジョイスの「ダブリンの市民」からの引用で、森永製菓の「チョコイス」を「ジョイス」と言い換える仕掛けに幾重にも罫がかかっている。さらに、「いつか……」分かるのと、「どうしても……」の内容の差は大きく、これを話題に組み立てる技術や勝気な叔母の登場のさせ方。
(略) 小道具の配置、筋の流れなども無理なく自然体だ。

沢山詩を紹介できないので分かりにくいかもしれないが、いろんな物語を絡めて、不思議な世界を紡ぎ出している詩集である。牧田榮子は木村の作品が日常の言葉、仕草、から成り立っていることから中原中也とつながって詩について考えていく。詩集評というより詩集を読む、という形で書いている。最後に詩集の出版社などの紹介が欲しかった。

丸田礼子「季村敏夫詩集『日々の、すみか』を読む」
〔ア・テンポ〕67号〕

色々な災害が起きた時、当事者の責任とし

から、経験したことのない遭遇も、そこにあつて体験化し、しずかに歌うことができた。詩集全体を貫いている作者のこの姿勢が、全体を覆うしずけさのひとつの要因ではないかと思へた。

〔祝福〕

（「祝福」）

（「月と鸚鵡」）

（「風になるまで」）

[illegible]

同じ神戸で同じことを経験し、同じ光景に出会った丸田さんだからこそ、季村敏夫の思ひに心を深く挟られるのだろう。あれから三十年。三十年経ってこの詩集を取り上げてくれたことが嬉しい。

青木佐知子〈論考〉「詩にまつわる随感」——山村慕鳥の「風景」〔Messier〕65号）

早春になると毎年習慣のように浮かび上がってくる詩がある。

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな

（山村慕鳥「風景」「聖三稜波瑠」）

ご存知のように、これは一連で、同じようになのはなは三連まで続く。ただ七行目だけが「かすかなるむぎぶえ」「ひばりのおしゃべり」「やめるはひるのつき」に変わるだけで、読んだ人はいいてい、一面菜の花畑が広がってひばりが鳴いているのだかな風景を思い浮かべる筈である。ただ三連まで来て、「やめるはひるのつき」ではたと立ち止まる。

三稜波瑠とは、いわゆるプリズムのこと。三稜鏡ともいわれ、文字通り稜が三つある波瑠である。慕鳥はプリズム、つまり三稜波瑠の上に「聖」を付して詩集名としたのであるが、そこに対象に向ける彼の姿勢を感じ取ることができる。

青木さんは、この詩集を読んでこの中の詩に共通した語が多く用いられていることに気づく。それは銀、銀色に類することば、ぶらちな、銀魚、水銀、銀ねず、銀貨、純銀。なかでも純銀は35篇中4篇もあり、いかに慕鳥の心が銀のイメージに向って傾斜していたかを物語っている、と述べている。

「風景」にはサブタイトルの小さく「純銀もざいく」と示されていたという。

「いちめんのなのはな」の群落の前に付けられたこの副題は、詩題の「風景」が純銀のもざいくであるのを意味するのだろうか……（略）これは単なる情景描写では無からうと気づいた。（略）無数の菜の花のざざめきから離れて、私の眼は黄色の図形の上を行き来していた。ここでもざいくを成しているものは波瑠であろう。とすると、それはとうぜん透明感を持って純銀の光りを受ける。慕鳥にとって純銀は神からの光りであるから（略）それは彼の心象風景そのものだったかもしれない。（略）

ある時、慕鳥に関する文章の中に「……詩はす裸の声である／詩はまんだらである」というのを見つけた青木さんは、まさに「純銀もざいく」はまんだらのだ、と気づく。一面に広がる菜の花の風景が銀糸で織った紗を飛ばせた風景に変わったのである。

さっと読めば広々とした菜の花畑の風景にみえるこの詩、「やめるひるのつき」に引っかけられるくらいで、普通はそこまで読みとることはない。

山本瑛子「スターゲイジーパイ」〔雲〕10号

オープンに入れて焼き時間をセットするとエプロンはずして

椅子の背にかけて

おにぎりみたいなかたちの滑り台のある公園のうしろに

いつ行っても誰もいない

エプロンのような空き地がある

其処からは

手を伸ばせば届きそうなところに

宵の明星

まうえを西空へと通過していく凍星の

コクビツトにカーリーヘヤーの男の子たちが

が

いたずらっぽく笑って

（略）

焼き上がったスターゲイジーパイの

魚と一緒に見上げていると

夜空は凍星まみれになっていた

パイをオープンに入れて、焼き上がる時間

公園の後の空地へ。宵の明星が輝いて。誰も

いなくても寂しくはない。凍星からカーリー

ヘヤーの男の子たちが笑いかけてくれる。詩

の発想と展開が面白い。夜空は凍星まみれに

なっていれば、にぎやかだが何処か寂しい。

重村サヨミ「朝がきた」〔Rosa-Kernel〕10号

そうだ昨夜は寝ないつもりでいたのに
つい横になり 朝がきた

お日さま やっとお目覚めですかと
肩の高さで笑ってる

母が家で眠る最後の夜だったのに
あっけなく 朝がきた
夜通し起きてて
いつばい語りかけるつもりでいたのに

のんびりしたらええでといってくれるかな
もつとしっかりせなあかんと
怒ってるかな

もう二度と怒られることはないんやね
事情は分からない。お母さんは施設にでも
入る前夜だったのか、もう絶望で自宅に帰っ
てきていたのか。明るく書いているが普通の
「朝がきた」ではない。悲しみが滲んでいる。
テーマ詩「穴」で同人の「私の心の静め方」
も面白いのでついでに紹介しておく。

真夜中にそっと起き出し／スコップ片手
に河原に降りて／穴を掘る／それからお
もむろに穴に向かい／神にも聞かれてはな
らない／悪態をつく／穴は埋め戻し／何
食わぬ顔で布団にもぐる

森原直子「窓のかたち」(「多島海」47号)

陽射しは
窓のかたちして

「背比べをしているの・・・」

木造校舎の廊下に響く
子どもたちの甲高い声

春の日射しは

真っ直ぐに先を見つめる

子どもたちの輝きのように

窓のかたちして

日射しの視線

私は 振り返る

どこかで

見失ってしまった

自分の言葉

はみ出した影のかたち

私の

かたち

木造校舎に春の明るい日射しが差し込む。
窓のかたちで。その真っ直ぐな日射しは眩し
い。言葉を見失ったと感じる自分には。明る

い光と曖昧な影の対比が、作者の心情をよく
出していると思う。

富沢智「れえこさあん」(「水の呪文」57号)

母の入所している養護施設で

コロナの

クラスターが

ナミさんもと

看護長のFさんから電話

(略)

隔離入院先の相談 認知で

動き回っていて ああいまもここに

G病院しか受け入れてもらえなくて

精神科の個室で

拘束も 面会禁止

東京の弟に電話 シカタガナイネと

(略)

翌日うららかな春の日

(略)

ゆつたりと大学病院のキャンパスのような

裏口で呼ばれ すべての書類にサイン

(略)

母がしきりに女の人の名を

呼んでいたという 拘束されて

れえこさあん

れえこさあん

これは堪える。コロナの時そんなこともあったと思うが、コロナでなくてもそんなことはあり得る。シカタガナイネ、シカタガナイネ、なのだ。春の日、ゆったり広い大学のキャンパスのようなところというのが、拘束されて叫んでいる母の姿とよく対比されている。誰かわからない「れえこさあん」と呼ぶ声がよく効果を出している。

藤戸高光「ぼくたちの宿題」〔GAGA〕92号

その日は雨が降らなかった
ここ四五日前まではひどい雨が降り続いて
いた だが

ほどよく晴れたそんな日
突然じいちゃんが亡くなった
元気だった それでも
呆れるほど忘れっぽかった

(略)

朝食を二度食べたがったり
迷子になって電話が掛かってきたことも有
った

きれいな箱に入った洗剤を口に頬ばり

(略)

それでも

じいちゃんそれまでと同じじいちゃんだ

(略)

毎日変わる出来事に一喜一憂した ドキド

キした

ハラハラする日が終わらない気がしていた
そうした時の突然の死だった

(略)

まるでぼくたちが死を望んでいたような残
酷な後ろめたさが残った

(略)

そうしてじいちゃんは ぼくたちに
おおきな宿題のような忘れ物をして逝った

長くぼくのモノログが続くが、先の宮沢
智さんの「れいこさあん」と同じ、歳取って
訳が分からなくなるのは、周りの人は実は大
変だ。悲しみや怒りや悔恨やさまざまな感情
を残す。だが本人にはまったく分からない。
日本は超高齢時代を迎えている。さて。

中山巧「悔恨」(「三重詩人」270号)

覚えている

今でもはつきり

小学校二年の息子を
いつまでも責め立てた
赤帽をなくしただけなのに
どこでなくしたのか思い出せ

何度も問い詰めた

父の大きな声に泣きじやくりながら
赤帽を落としたのは
細いトンネルをぬけた
下り坂の溝の中だったと言った

車に乗せて捜しに行くがそこに赤帽はなか
った。嘘だったのだ。「息子さんの赤帽、荷
台に落ちとったでな」と学校帰りの息子たち
を軽トラの荷台に乗せてくれた人が持って来
てくれた。責め立てた自分に非があった。と、
何年前の話だろう。親子っていいものだ。

【受贈詩誌】

「ア・テンポ」67号・「アリゼ」226号・「石ノ
森」203号・「大阪エッセイ」73号・「KAIGA」
128号・「風の道」23号・「GAGA」92号・「雲」
10号・「小手鞠」29号・「軸」155・156号・「多
島海」47号・「潮流詩派」281号・「月の村彦番
地」17号・「天国飲屋」7号・「波蝕」34号・
「飛脚」51号・「笛」308号・「ぼとり」78号・
「三重詩人」270号・「水の呪文」57号・
「Messier」65号・「RIVIERE」200・記念号・
「歷程」620号・[Rosa+Kerne] 10号